

佳作 [MR誕生 100 周年記念論文コンクール『私が目指すMR』]

「患者さんのお役に立ち漢方医学を織り込み最適な治療を提案できる MR」

中村克也（株式会社ツムラ 高松支店学術課）

私は、薬学部を卒業後ドイツ系の製薬会社に入社して、半年の研修後、造影剤やステロイド剤を中心とした MR 活動を行っていました。当時はプロパーと呼ばれていましたが、医師や検査技師の先生方へ造影剤画像のアドバイスなど、プロの仕事として日々充実した毎日を送っていました。しかし、いつしかステロイドを中心としたクレーブスの末期治療の嵐の中に突入していました。各メーカーが激しい戦いを行っていましたが、果たしてこれが患者さんのために本当に役立っているのだろうか、ステージ 4 をターゲットにしていたが、徐々に投与開始が前倒しになっていきました。私は自問自答しながら、薬学を出たのに死の商人を行っているのではないかと、精神的に追い詰められていきました。そんな時、漢方エキス製剤が薬価に収載され、その普及のためにプロパーの募集があり、これだと思い転職を決意しました。余談ですが、ステロイドの末期がん治療の戦いは、モルヒネ徐放錠の薬価収載で終焉を迎えました。

漢方メーカーに入社して、当初は西洋薬に匹敵する医学的なエビデンスが全く無く、そのエビデンスを創造していくために、過去の臨床報告例や古典の本のコピーを携えて、新しい臨床研究を依頼するために大学病院などを訪問して行きました。最初は、某大学の薬剤部長に「インスタントコーヒーを宣伝するのに、サイホンコーヒーのデーターで宣伝するのですか」と門前払いもありました。確かにその通りであり歯がゆい時期が続きました。そのうちに研究成果が徐々に現れてくると、臨床最前線の先生方より嬉しい効果の報告を聞くようになり、人体には体の侵略者に対する新薬などの大砲は必要であるが、平行して路地裏の戦いで頑張る歩兵隊が必要であり、漢方製剤の役割を先生方より肌で教えて頂きました。また当時、賦活か抑制かと言われていた肝臓治療の分野においても、免疫調整と言う曖昧な言葉が徐々に浸透していき、医学の発展に少しは寄与してきたのではないかと思います。

私は、大学病院や臨床研修病院を中心とした MR を 16 年、その後支店学術課長として 20 年を経て、来年定年退職になります。今現役で職務を全うできる幸せを感じています。その間、多くの先生方に西洋医学を縦糸に、漢方医学を横糸にした考えを基にして、漢方製剤の薬剤選びのアドバイスを行ってきました。

先生方を通じて、患者さんの喜びも悲しみも一緒に味わい、幾度となく MR 冥利につける経験もしてきました。先生から質問があれば、西洋・漢方両方の医学文献を読みあさり、漢方の古典の本も読み、多面的にアドバイスを行ってきました。それを苦痛とは感じることはありませんでした。むしろ支援できる立場であることを喜びに感じていました。いつも患者さんを、身内のように思い、また両親のように思って、資料を作って先生方に提供してきました。またあらゆる場面で、病院薬剤部の先生方にもご支援を頂いたことが幸せであり、私の心の支えにもなりました。

現在、漢方製剤の研究は、日本のトップグループの先生方が多方面で臨床試験を実施しており、

数々の論文を世の中に発信して頂いています。米国でも FDA の認可のもと臨床試験が開始され世界のトップクラスの先生方が新しい治療法の確立を目指し努力されています。日本の漢方製剤が、世界の人々に役立つ時がすぐそこに来ていることを実感しています。国内の大学でも若い先生方が臨床研究を行いながら、漢方製剤に大変興味を持ち、漢方医学の勉強も始めてきています。西洋医学で難渋している疾患に役に立てたいと仰っています。

私は、漢方メーカーに転職後、漢方製剤の導入の初期の頃から現在の状況まで、立ち会うことが出来て大変幸せでありました。私の MR 像とは、常に患者さんのお役に立ちたい一心で、先生方に色々な選択を提案してきました。漢方薬や東洋医学では無理なこと厳しいことは厳しいと言ひ、副作用の話も積極的に伝えてきました。西洋医学が病気の診断学を中心とした縦系であれば、漢方医学は患者さんの体調や体質から使い分ける横系であります。両方の糸を織り込んで治療に当たれば、最良の結果を求めることが可能であると信じます。私は退職後も、薬剤師として一生、患者さんのお役に立てる仕事を選択して活動していきたいと考えています。(終)

クレーブス：クレブスともいう Krebs〔独語〕古い時代は医療現場ではドイツ語が多かったが、現在はがん Cancer〔英語〕の言い方が多く、悪性腫瘍、癌腫・肉腫の総称です。

ステージ4： 癌の進行のステージを表し、原発巣以外の他の臓器に転移したステージを4期というが、以前は治療方法がほぼ無い状況でいわゆる末期がんの時期をさしていたが、現在は医学が進歩して、手術や抗癌剤治療の選択肢がある場合もあり末期がんではない場合もあります。